

ユニテ

UNITÉ

3



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
ロラン＝マルヴィエーダ往復書簡	南大路 振 一 2
ロマン・ロランの個人主義について	宮 本 正 清 18
ロマン・ロラン没後30周年記念行事報告にかえて	織 田 和 夫 21
《ビュールとリュース》を読むにあたって	波多野 茂 弥ほか ... 25
ロマン・ロラン研究所公開講演会報告	29
ロマン・ロラン友の会だより	31



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

「…明日にも死なねばならないかのように毎日を生きること。それと同時に、けっして死なないもののように生きること。それは、人間の歴史の四分の三を満たした混乱の時代において、わたし達の偉大な同胞たちの多くの人々の状態でありました。わたし達はあまりにもそのことを忘れていました…もしも人類が（発作的にやるように）獣性へ後戻りするなら、わたし達は「人間」の名誉のために、毅然として立ちましょう！わたしたちの内にある神聖なものは、わたし達が歩いている血まみれの泥よりもはるかに生氣にみち、はるかに真実です。…」(1916年7月1日)

*

「…ご承知のとおり、わたしはつねに二種のことを区別してきました。すなわち、自分のために、考えることと——万人のために、語ることです。わたしが自分のために（そしてがっちりした知的脊柱をもっていることをわたしが確認したひじょうに親しい人々のために）考えるときには、いかなる否定もわたしの自由を制止することはありません。わたしたちはわたし達の前に、上方に、下方に、周りに、無限の空間と時間をもっています、大空のただ中を天翔ける大鳥のように……

ところがわたしが万人のために語るときには、わたしは自分が、どういう場所で、どういう時刻に、どういう人々に話すかということを忘れることができません。そしてわたしはわたしの言葉が彼らの心にどのような反響をあたえるかを予見しなければなりません。」
(1916年7月16日)

右の二つの手紙は、第一次世界大戦中に、ロマン・ロランが友人のピエール・ジャン・ジュヴに書いた手紙の抜萃で、1967年に、アルバン・ミシェル書店から刊行された「カイエ・ロマン・ロラン」の第17号の143頁からとったものです。

— 宮 本 正 清 —

《マルヴィーダとロランの往復書簡》(2)

南大路 振 一

I マルヴィーダからロランへ¹⁾

ヴェルサイユにて

1890年8月17日、日曜日の朝

　　したい友、あなたがローマへは戻らないかも知れないと考えると、私はひじょうに不安になります。そのようなことは、私にとって深い悲しみです。しかしあなたにとっては、もし苦しい戦いを思い出さずにすむというのなら、或る意味でそれはよいことかも知れません。事実そうなら、私はあれこれ嘆くことを控えます。しかし人生はどうしてこうも道理にさからい、もつとも単純で、もつとも価値ある事柄がなくてもよい障害にぶつかるのでしょうか？ たとえば、あなたは私たちのところ〔ヴェルサイユのヴィラ・アミエル〕でごく快適に半月をすごすことが出来るでしょうに。ここには空いた部室が二つあります。午前中あなたは何にも煩わされることなく仕事を完成することが出来るでしょう。そして午後は私たちと一緒にでもよし、またあなたひとりでもよし、気の向くままに散歩をし、晩には音楽に興ずることが出来るでしょうに。きのう私はオルガ〔モノー夫人〕とこのことについて話をしました。もしそのようになれば彼女も大変喜んだことと思います。私にとってあなたの仕事はこの上なく大切です。どうか完成していただきたいのです。そして私には、それを仕上げるのにあなたが平穩と完全な自由を必要としているのがよく分かります。この二つをあなたはここに見出すでしょう。そして、もしかするとそれがあなたの将来に決定的な意味をもつかも知れません。私にはそんな予感がするのです。いずれにせよ試してみるだけの価値はあると思います。しかし今はもう出来

ないことです。そしてこれがまた自然なのでしょう。(――)

心をこめてあなたを愛します(もう一度、こう言ってかまいませんか?)

M. マイゼンブーク

注

- 1) この手紙に先立つロランからの手紙(8月10付)は、「全集」第32巻(『ユルム街の僧院』その他)の386頁以下に収録されている。

II ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年8月17日、日曜日の晩

　　したい友、あなたとお会いし、お話をした後、たったいま戻るとお手紙が来ていました。さっそくお返事せずにはいられません。それというのも、私たちの対話とは別に、また私たちの対話があるにも拘らず、私たちの文通をつづけることが、私にとってあまりにも大切であるからです。それでもう今から申し上げておきますが、ローマでまた何度もお会いするにしても、しょっちゅうお手紙をさし上げます——手紙を書くとき多くの時間が失われることはあなたもお分かりですが。しかし私の手紙を読むことでお疲れになるようなら、そのことを私に言って下さらなくてはなりません。自分でも承知していますが、私は自分のなかに生きているものについて半分もしゃべらない人間です。それですから私は、私を愛してくれる人びとに、それを書かねばならないのです。

　　半月のあいだヴェルサイユへ来るようにとの有難い申出をして下さった、あなたとモノー夫人のご好意にただただ感謝いたします。しかし実をいってこれは全然できない相談です。ほんの一日でも私の身内の者たち——とくに母から離れることは、

考えてはいけないのです。もともと母は私が昨年ローマへ行き、そこで多くの楽しいものを味わったことを、すでに私のひどいエゴイズムだとみなさずにはいられませんでした。(彼女の言い分を少しばかり認めぬわけにはゆきません。)それで少なくとも私の休暇はすっかり彼女のものになるという次第です。

ヴェルサイユのほうがパリよりも仕事の環境がよいというのは、おそらくそのとおりでしょう。しかし私の最大の敵はけっきょく私自身なのです。もし自分が自由であると感じられる時間にしか本当に仕事ができないのなら、それ以外の時間に私の活動を妨げるのは、外界の騒々しさであるよりも、はるかに私自身の魂のひどい混乱です。———したい友よ、あなたは私の仕事のことで私以上にあせりを感じておられます。あなたが「そして、もしかするとそれがあなたの将来に決定的な意味をもつかも知れませんが」とおっしゃるのは、それはあなたの誇張です。私の将来は今になって決定される必要はありません。それは(私だけに関するかぎり)すでに決定されています。どうかご心配なさないで下さい———私の将来をその本質的な点で変えるものは何もありません。ただ病氣や、それに当然のこととして死は別ですが。(これは私にはどうにもなりません。)どのような事になっても私は書きます。そして絶えず書きつづけるでしょう。そして私がエコール・ノルマルに入学して以来(そして音楽についての私の夢が終わりを告げて以来)、私はこれ以外のことを一度も考えたことがない、と言ってよいでしょう。すべてこれ以外のことは口実でした。時には苦しい口実でした。(あなたに何度もお話したとおり、私は試験準備をするようになって以来、他の人びとを絶望させるような仕事をいくつもやりました。)それから私は自分がもっている傾向を時間をかけて慎重に吟味し、何をさておいても、まず私の学業生活を終えようと思いました。私は急ぎはしませんでした。これからも急ぎはしないでしよう。なぜ急ぐことがあるのでしよう。私が関心をもつのは芸術だけであって、芸術が生む利得ではありません。実が熟すれば、その時に摘めばよいのです。どのような事になろうとも私は書くでしょう。このことを別にすると、私はシュアレスにひじょうに似ています。つまり私には、私の書くものが世間の読者たちの嗜好に合うと信ずることは出来ません。私は彼らをあまりにも軽蔑しています。ついでに申しますが、私には世間の読者たちの嗜好はおよそ念頭

にありません。そして私にとってそれだけが大切である理想の読者は存在しないこと、或はほとんど存在しないことは明らかですから、私は成功を収めるにも、そのような読者をあてにすることは出来ません。また全然あてにもしていません。しかしシュアレスと共にこのような究極の結論に到達していながら、私は彼とは正反対の決意をします。つまり、「しかし私は書くだろう、どんな事になっても」と。私はこのことが私にとって常に欲求であつたが故に、また私にとって次第に喜ばたは慰めを意味するが故に、そしてまた私が生きることを欲し、私の中にあるもの（それがどれほどささやかであろうと）を実現しようと願うが故に、私はそうするのです。

これ以外のもの、つまり私の生活の外的な事情がどのような形をとるだろうか、それは私には分かりません。それは変わることがあるでしょう。しかしこの私が変わることは——願わくは——ないでしょう。いずれにせよ私が長いあいだ教師でいるというのは、ありそうもないことです（むろん教師になつたとしてのことですが）。これはあなたにこつそり打ち明けます。といいますのは、（私の個人的な感情を云々しなくとも）私の声ではこの職業は長つづきしなないと思われるのです。

最後に——。私にはローマで第二年目を過ごしたいと願う理由がたくさんあります。私の内的本質を完成するには、詩（ポエジー）の年が少なくとももう一年必要なのです。それは書かれた詩作品を別にしてです。つまり、詩的な自然の中で詩的な生活を送る一年です。「そこ〔ローマ〕へ戻らないほうがよいかも知れぬ唯一の理由」——すなわち、あなたが私のために恐れて下さるあの「戦い」について言えば、これはまた最高の詩ではないでしょうか？ そしてこの戦いをくぐり抜けた時、私がよりつまらぬ人間になっているだろうと心配なさるのですか？ もしそうでないのなら、一体なにを心配なさるのですか？ この苦悩を知らない者たち、それは気の毒だというべきでしょう——そのような哀れな人間がこの世にいるとしてですが。そしてもしかすると、このような人間がたくさんいるのかも知れません。

心からあなたを愛しています。ええ、どうか私を「心をこめて」愛して下さい。そう言って「かまわない」だけではありません。どうか「心をこめて」私のことを思つて下さるよう切にお願いします。

R. ロラン

私にとってこの8月18日という日は、一年前の今日亡くなった気高いヴィリエ・ド・リラダンの思い出に捧げられています。彼が死ぬその日に、やっと私は彼を知るようになりました。それ以来、私は心底から彼を愛しました。またあの8月18日以来、彼が生きているあいだ私のとりつづけた無関心な態度を、自分に何度もきびしく咎めました。私はこれを償う方策があればと思います。¹⁾

注

- 1) この追記については、「全集」第32巻、377頁以下に所収の1890年4月初め〔7日〕の手紙を参照。

III マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年8月19日、火曜日の朝

したい友よ、どうか気遣わないで下さい——私にとっても私たちの文通はひじょうに大切なのです。このような手紙は時間の損失にはなりません。しかしこの次にお会いするまでに、私のこの前の手紙のなかの二点について説明しておく必要がないなら、今朝はあなたに書きはしないでしよう。つまり、あなたが私のいう意味には十分とらなかつたかも知れない点が二つあるのです。まず、あなたが仕事を完成するのを見たいという私の「あせり」ですが、私はあなたが変わらないだろうこと、あなたの人生の内面の道はすでに動かしがたく定められていることを私は確信しています。もしその道が別の方向をとるようなことがあれば、私にとってはこの上なく残念です。あのとき私にあったのは、ただ一つ、目的に向かう途上で困難ないくつかの個所をもしかしてあなたが通らなくてもすめば、という思いだったので。——それから或る一般的な考えが働きました。あなたはご存知です。力強く、それ

でいて柔和な声であらわれ、この世界に向かって理想的な生まれ変わりをするよう呼びかけるのを見ることは、私のもっとも好きなイリュージョンの一つです。（イリュージョンとはいえ、その実現は可能でしょう。）或はそれは洗礼者ヨハネの声、理想的な人間存在を先駆ける者の声です。私に「あせり」を覚えさせたのは、とくにこの最後の希望でした。私はこの世を去る前に、この世界がそのような声——私はあなたの声をそう思うのですが——に耳を傾ける力を今なおもっているかどうかを見届けたいのです。もし私には関係のない事柄で私がいまにも要求がましく見えたのなら、どうか許して下さい。まったくあなたの言うとおりで——^ま実は摘まれる前に熟していなくてはなりません。

次に第二の点ですが、何か苦悩があなたの価値を損なうことがあるなど、どうして私に信じられるでしょう。いいえ、私は今ではあなたにたいし、何物にも揺らぐことのない確かな信頼をもっています。私はただ心の苦しみが再発しはしないかと考えたのです。心の苦しみは、たとえ詩（ポエジー）をおびるにしても、人生における多くの事物の歩みをはばみ、人が推測する以上に存在の根底をむしばむものです。私はこのことを自分の経験から知っています。そして私はここにいう心の苦しみが及ぼす力を、あなた自身について今までに体験しなかったでしょうか？ すっかり詩そのものの虜になったあなた、偉大な思想や崇高な感動がそこから浮かび出るあの美の流れに浸っているあなたを見て、あなたは仕合せなのだと思っていると、突然あなたは全く個人的な心の苦しみに没してしまい、とても恐ろしい「不機嫌」にすっかり捕えられているのです。そこでは詩さえも無力でした。これが、したい友よ、あなたについての私の心配なのです。——つまり、あなたの平穩と、あなたの仕事と、純粹に精神的な生活領域におけるあなたの順調な発展についての私の心配だったのです。実際、この純粹に精神的な生活があなたの不安定な魂の「ひどい混乱」で妨げられることは何度でもあるのですから。私がこの点でも言いすぎをしたのなら、どうか赦して下さい。私はフィディアス¹⁾のような発作に襲われることがよくあります。つまり、私の精神のなかに理想的なものの姿が——まだ形をなさぬままに——映った場合、私は手を貸してその姿を明確なものにしたくなるのです。ミケランジェロが大理石のなかに潜んでいる理念（イデー）

をあらわにする時、「di scoprire」²⁾と言ったのがそれです。— 以上のことすべては、あなたにたいする私の偽らぬ愛情のせいにして下さい。この前に、「もう一度、こう言ってかまいませんか？」と私が尋ねたのは、もちろん冗談にです。私がそうしてかまわないことを私はよく知っています。私はそれを自分で感じているのですから。では明日また、したい友。

M. M.

注

- 1) 前5世紀のギリシャ最大の彫刻家ペイディアスのこと。
- 2) 「発見すること」、「あらわにすること」の意。

IV ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年9月8日、月曜日の晩

したい友、私たちは明日、火曜日の日中にならずお伺いします。しかしそれにも拘らず私はこうしてお手紙をさし上げます。それは、あなたとゆつくりお話できるようにならないと思うからです。

ローマでの新しい一年から私はひじょうに多くのものを期待しています。いま終わろうとしているこの一年がすでに、私にあれほど多くのものを与えてくれました！私の魂の静けさのうちにどんな営みが進行したか、あなたはとてご想像になれません。私の魂はまるで波立つ潮のようでした。そして私は徐々に、ローマの平和のうちに暗雲が消え、清澄さが戻って来るのを感じました。この魂を時折なお激動させる情熱そのものも、ただ残り滓を吹き散らせる激しい嵐のようなものです。—

そして私の内的な生、私の真の生、すなわち詩的な生は、自然と芸術とまったく純粹な情熱との息吹きにふれて目ざめるのです。私はもろもろの力が私のうちに動くのを感じます。そして私は、それらの力を自分のなかにおぼろげに感じはしても、それらを他の人びとと自分自身とはっきり示すことができなくて、喜ばしくもあり悲しくもあるのです。（人が自分の創造するものを完全に意識するのは、ただ創造の瞬間においてだけです。）

あなたに私の欠乏——私のもう一つの欠乏をお話ししましょう。私に欠けているのは感情の能力ではありません。私のなかには——と、私は思うのですが——多くのデーモンが棲んでいて、ただただ束縛を解かれることを望んでいるのです。また私には理解の天分——事物とその原因についての洞察力もいささか具わっているでしょう。しかし私はこれらの能力をはつきり知ってはいません。私に欠けているのはこれなのです。私はこれらの能力を自分の眼でみて知っているのではありません。私がそれらを知っているのは、自分の経験からではなく、ただ他人をとおしてにすぎません。私はこれまで外に向かって生きたことはありません。私の内面の戦いは、かなり遅くまで、周囲の世界を考察する自由を私に与えてくれませんでした。私は現実の生を知るといふより、むしろ推測することのほうが多かったです。しかし今、現実の生がどうしても必要なのです——それを土台にしてより現実の生を構築するために。私の思考、私の感情の一つ一つが、激しく存在に焦がれ、そのなかに自己を実現すべき形態（フォルム）を切に求めるホムンクルズ¹⁾のようです。私が再現したい理想的な形態を包みこむべき個性的な形態。これがいちばん私には欠けているのです——もろもろの個性的な形態の世界、つまり現象の世界を私がほとんど知らないために。私が心をひかれ、また常にひかれたのは、純粹な詩作品ではなく、生——つまり、現実の生がそのなかに展開する理想的な生であるだけに、これはいつそう耐えがたい欠陥です。自分のうちに生起する一切を形あるものにし、これらのために私の存在のそとに一つの存在を創造することは、私にとって一つの欲求なのです。しかも他の人びとの生について私が無経験であることが、私にはひどいような障害になります。たしかに、私は生の形成のための素材を自分のなかに持っていると思います。しかし形態が私の手をすり抜けてしまうのです。

どうも私は一つの短い論説を書いてしまったようです。そしてそのことで自分にひどく腹が立ちます。といたしますのは、ゲーテとの文通でシラーが学術めいた論説をひどく偏愛するのを私はまさに非難しようと思っていたからです。私はこの数日、自分の気持を静めるためにこの往復書簡を読みました。そして読んでみて私の心には、彼ら二人にたいする深い敬意が湧いてきました。しかし真の愛情はあまり湧きません。愛するか憎むか、そのどちらかの欲求——読書のさい私はいつもこれを感じるのですが、この欲求はいまの場合には満たされません。ゲーテとシラーはあまりにも芸術家です。

ちようどお手紙をいただきました。私は心からあなたを愛します。どうか信じて下さい、私はあなたと、あなたの愛にいつも恥じないようにします。そうです、たとえ私が打ち負かされる場合でさえも。(そして今回はこのことは起こらないでしょう。)

シュアレスに、私の生がいかに彼の生を必要としているか——ことに今という今必要としているかを伝えて下さい。彼をイタリアへ来させるかすかな可能性がほんとうにあるのでしょうか?

どうか私を愛して下さい。そして時々——いや、この数日は何度も私のことを考えて下さい。

心をこめてあなたを愛します。

R. ロラン

注

- 1) 『ファウスト』(II部、2幕)に出てくる、レトルト内につくられた小人間。

V マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年9月10日、水曜日の朝

(-----)

私にはあなたに欠けているものが完全にわかります。それは、私の生活があれほど波乱にとんでいたにも拘らず、この私にも欠けていました。思うに、その原因は一部分は理想主義（イデアリスムス）とあまりに強度の内的生活とにあり、一部分は外的環境にあります。しかし、こういったことすべてを身にしみて味わった私は、このどうしても避けがたい欠乏をなくするため、最善をつくしてあなたを助けましょう。そうです、人は自分を対象にしてみなければなりません。そのためには鏡が一つ必要です。つまり自分の仕事（作品）を、自分には属さない対象——したがって公平に判断される対象のように考察できる場として、別の魂を一つ必要とするのです。そしてまさにこのことがシラーとゲーテの文通をあのように素晴らしく、有益なものにしているのです。自分たちの魂のもっとも深い感激のなかから汲みとった思想を芸術的に完成させるため、互いに相手のなかで——ちょうど鏡のなかでのように——自分を考察し、判断したこれら二つの卓抜な精神。そこで年上のゲーテが年下の者〔シラー〕の批判と意見に耳を傾け、それに従うさまは、感銘ぶかく好感のもてるものです。そして私には、この文通から現われる二人のすがたは、ことのほか愛すべきもののように思われます。

そうです、あなたは将来、外なる世界とそのもろもろの形態を徹底的に研究し、観察しなければなりません。これこそ、自分をとりまく世界を考察することによってゲーテが自分の魂の嵐から脱した時、彼がとった発展の道であったのです。そしてそれによってゲーテは、あなたの前にある偉大な女神¹⁾の清らかな静けさに到達したのです。とはいえこのことは、彼ゲーテがそれ以後も苦悩し、深く感動するのを妨げるわけではありませんでした。しかし彼は、ドイツのために一つの理想的な文

学を生むという自己の偉大な使命を意識し、彼はこの使命のために自分の心と他の人びとの心を犠牲にしました——手荒い仕方ではなく、^{あがな}贖いとして。それで私は、他の人びとの真に高貴な心は彼にたいして怒るのではなく、むしろ彼を理解したことを確信します。

(———)

いとしい友、どうか論説をつづけて下さい。それは私を疲れさせることはありません。むしろ反対です。そして私にたいし、自分のことを果てしなく話して下さい。それは私にとって、ほかの何にもまして関心のあることです。なぜなら私はあなたを限りなく愛しているのですから。

M. M.²⁾

注

- 1) ヴァチカン宮のケレス神の写真のこと。「全集」第32巻に収録された、1890年7月19日付の手紙(382頁)を参照。
- 2) この手紙にたいするロランの長い返事(1890年9月11日付)は、「全集」第32巻の389頁以下に収録されている。

VI マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年9月12日、金曜日の朝

したしい友、あなたの手紙のどれをとつても、あなたは、この上なく私の興味をそそるような問題のすべて——つまりあなたの心と精神のなかに起こっているすべてについて、これ以上は私に書くまいとしているようです。そのようなことは、私たちの文通を停頓させ、私たちの親密さを破壊するでしょう。(———) 私はあなたの仕事が——それが蜜蜂の仕事になるまでは——さしあたり「蜘蛛」のそれ

であることを好ましく思います。蟻の仕事はまことに有用には違いありませんが、あなたの資性のような、創造的な資性の持主たちには相応しくありません。

ゲーテにもどりましょう。あなたはゲーテとシラーの文通が冷たいと非難します。しかし、いとしい友よ、彼らは当時すでに成熟した人間でした。もう若くはなかったのです。彼らの情熱、彼らの火は彼らの作品のなかに生きていました。そして双方とも、この文通を自分たちの「蜜蜂の」仕事における相互の完成のためにだけ生かす十分な自信をもっていました。そしてこれがまた、深い友情と温かい関心の現われではなかったでしょうか？ 私たちは見ます、彼らがいつも一日千秋の思いで——ある時はイエナで、ある時はヴァイマルでというふうに——出合いの瞬間を待つのを。そしてそこで二人は、自分たちの精神と心がつくる共同体について至高の満足を感じたのでしょう。〔ヴィルヘルム・フォン・〕フンボルトとゲーテとの文通にも、どれほど深い感情がすべてこれらの人物を互いに結びつけたかがみられます。何という幸福感をもってフンボルトは、ゲーテとシラーと共にすごした時間について語っていることでしょうか！ そしてシラーの死後、フンボルトはゲーテに宛てて、この死が彼ゲーテの生活のなかに残したに相違ない埋めがたい空隙について、どのような調子で書いていることでしょうか！ ここにも、すべてこれらの人物がどのような理想を生命^{いのち}としていたかがわかります。彼らは一つの理想的な芸術を創造すること——私たちがまた持ちたいと願うような、一つの魂の故郷を建設することへの召命を受けていると感じたのです。それで彼らの努力目標であるこの高い世界での幻滅の苦々しさは、彼らの個人的な苦悩よりはるかに痛切でした——その苦悩はそれとして十分に深かったのですが。妻にたいするゲーテの感情を世間の人びとは一般にずいぶん問題にしましたが、その彼女の死は老いゆくゲーテに悲しみを残しました。その深さはアレクサンダー・フォン・フンボルトに宛てた手紙の胸を打つ数行から窺うことができます。しかし彼はこの苦悩にうち負かされてはなりませんでした。なぜなら、彼には果たすべき高い使命がありました。そして彼が自分の悲しみを人前に示さなかったのは、偉大な魂たち——異常な時にあたっては、^{オラフ}橄欖山の孤独な祈りのうちに甘んじて杯を手にとる¹⁾偉大な魂たちの羞恥心によることです。彼ゲーテが愛する者の死ののち、ただ自分の心と二人きりでいるために、幾

日も完全な孤独のなかに引きこもった時、彼の魂のなかに生じたことを誰が忖度できるでしょう。—— そうです、彼がフリーデリケ²⁾を捨てたこと、これが彼を非難できる唯一のことです。しかし彼はその頃まだずいぶん若かったのです。それに斟酌すべき事情がいろいろあります。 (———)

ひょっとするとフォン・シュタイン夫人が—— 彼が彼女をもっと早く、未婚のときに識ったとして—— 彼の天才が自由に発展しえたであろう伴侶としての妻であったかも知れません。しかし彼女もまた克己心を十分にもってはいませんでした。この手紙に同封して、私がいへんよく出来ていると思う詩を二、三お送りします。それは『ヴェルテル』のロッテの老年の姿によったものです。ゲーテに愛されたという思い出は、全生涯をこの世ならぬものにしたに相違ない、と私は思うのです。それで私はあの純朴なフリーデリケが後に結婚しなかったのが分かります。 (———)

心をこめてあなたを愛します。

M. マイゼンブーク

注

- 1) とくにルカ福音書22章39以下を参照。
- 2) ゲーテがシュトラースブルク遊学時代に知り合った、ゼーゼンハイムの牧師の娘、この愛からいくつかの美しい抒情詩が生まれた。

VII ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年9月13日、土曜日の朝

したい友、告白しますが、私はゲーテにたいする私の攻撃をすこし誇張しました。一つにはあなたをゲーテの弁護へと誘うため、その弁護が彼を愛する新たな

理由を私に与えてくれたかも知れないからです。といいますのは、私はやはり彼を愛しています——たとえそうは見えなくても。そして彼の芸術の魅力にもまして、彼という芸術家の人格が私を引きつけ——そして同時に突きはなしました。そうです、私はあのカトゥルス¹⁾のことば《Odi et amo》を本当にゲーテにあてはめることができます。「私は彼を愛し、憎みます」——交互に、次々と、ときには同時に。彼がみせる冷ややかさに私が冷静でおれたことは一度もありません。シラーが——まだゲーテを心から愛する以前ですが——ゲーテを憎んだことを私はうれしく思います。このような人物はこれら二つの相反する感情を他人に起こさせることができます。私にはそれが分かります。——「エゴイズム」という語をゲーテについて口にするには私ははばかりでしょう。それは全然適当ではないように思えます。私は彼が深く苦悩したことを知っています。そしてもし私が彼を愛するとすれば、それは何よりも——あなたが巧みに言われる——「偉大な魂たちの羞恥心」のためです。彼ゲーテには、単純で、一般の人びとには気付かれていない言葉で、しかも数々の感動と愛と苦悩を内に秘めている（そのことは感じられます）ものがあります。——しかしこういったことのすべてにも拘らず、彼は苦悩の原因をつくりました。そして意図的に——彼の理想の名において、彼の果たすべき使命の名において。私は彼の心よりも、むしろ彼の精神を非難します。私は人が自分の自我を犠牲にするのを好みます。しかし他人の自我を犠牲にするのは好みません。これは時として止むをえないかも知れません。しかし美しいことでは決してありません。

私たちは昨日——におりました。そこで——氏は私に「蟻」としての私の義務を思い出させました。これは彼として当然のことで、また義務でさえあります。しかし私にはひじょうに不愉快でした。といいますのは、あれ以来、学院の次の論集²⁾にどんな「蟻の仕事」を寄稿すればよいか、という考えだけでほとんど頭がいつぱいです。（私がヴァチカンでした専門研究で、第二年目が終わるときに提出するはずのものは別です。）——氏はひじょうに好意のもてる人物で、彼を少しばかり笑い草にするのは気がひけます。しかしなぜ彼はまた、何はさておき私と一緒にいるところでは考古学のことばかり話す義務がある、など考えるのでしょうか。彼は私があつたく考古学の素人であることをよく承知しているのです。——そしてついで

に言いますと、彼もまたそうなのです（私の同僚のなかの考古学者たちが言うところでは）。私は彼と二人きりになることがいつも不安です。私のほとんど知らない名前を彼が出まかせに口にするのを聞くと、私の頭はぼんやりしてしまいます。彼がせめて、学院のために私から何を期待しているかを示唆してくればよいのですが！ 私はそれをおよそ最善の意志でもって遂行する誠実さを十分もっています。しかし私を手引きする代わりに、彼はむしろ私を混乱させてしまうのです。彼は私から何かを望んでいます。しかしそれが何なのか彼にはよく分からないのです。そして私自身も中途半端にしか分かりません。このことが絶えず私の気になるのです。——私自身のことは別にしても、いまの学院は、それを指導している（かに見える）手よりもっと強力で、もっと活動的な手をどれほど切実に必要としていることでしょう！ そしてこれは残念なことです。なぜとって——氏はたしかに立派な人物であるからです。ただ私の好みからいうと少々「実体がなさ」すぎます。（お分かりいただけますね？ しかし、そ知らぬ顔をしていて下さい。たいへん不都合なことですから。）

歴史とはまったく別に、いま私はルネサンスのなかに生きています。生と情熱のなんと力強い泉でしょう！ シェイクスピアはけっして一切を汲みつくしてはいません。しかしシラーがこの時代に魅惑されなかったというのは一体どうしたことでしょう。——そしてゲーテもまた。といたしますのは、実際エグモントもマリア・ストゥアルトも全くといってよいほどルネサンスの性格をもっていません。——フランスではヴィクトル・ユゴーとその一派がただ衣裳と美観と外的な道具立てと多種多様な暗殺行為に誘惑されたにすぎません。それでもあの時代には数々のすばらしい人間的な力があつたのであり、ただ新しい生命へと目ざまされるのを待っているのです。

衷心からあなたを愛します。

R. ロラン³⁾

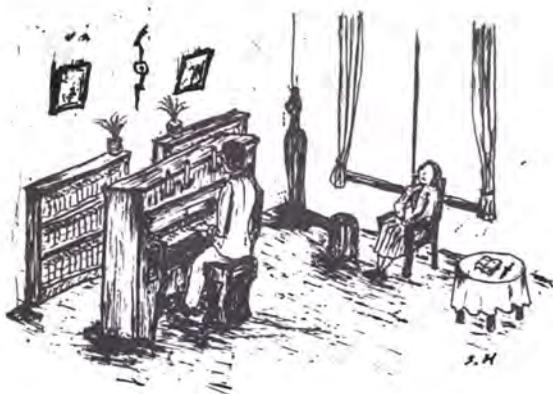
注

1) 前1世紀、ローマの大抒情詩人。

- 2) ローマとアテネにあった「フランス学院」(ロランの留学先)の論集のこと。
- 3) これにつづく1890年9月14日付のロランの長い手紙は、「全集」第32巻の392頁以下に収録されている。

＜訳者あとがき＞

1889年秋から二年間のローマ留学中、ロランは1890年の夏期休暇をパリで過ごした。一方、老マルヴィーダもこの頃、パリ郊外のヴェルサイユに住む養女オルガ・モノー＝ヘルツェン夫人の許に滞在していた。そしてロランとマルヴィーダのほとんど日課のような文通はここでも続けられた。そのなかから数通を選んでみたが、ロランのものは——前回と同様——ドイツ語からの重訳であることをお断わりしておく。(1975年3月)



ロランの個人主義について

宮 本 正 清

ロマン・ロランは1931年2月初旬に、二人のロシア人フェドール・グラトコフとイリア・セルヴィンスキーに宛てた手紙で、次のように、答えている。

「ご承知のとおり、私はあなた方の忠実な友であり、西ヨーロッパにおける〔ロシアの〕支持者です……私はソ連が為した事（革命のこと）を信じています。私は命のある限り、それを擁護するでしょう。——従って私たちは意見の一致を見て、それを喜ぶ理由が大いにあります。ところがあなた方は、私が自分は「個人主義者」であると言い、自分は「人間性」を愛する^{ユマニテ}と言うことを心配しておられます……

したい友、それは真実です。そうです、私は「個人主義者」です。そうです、私は「人間性」の信者です。しかもこの個人主義者、またこの人間性の信者はあなた方のために戦っているのです。「そんなことはあり得ない！」と叫ばないで、それが事実であることと、個人主義や人間性のもっともすぐれた闘士たちをソ連に引き入れることをあなた方は祝福すべきではないでしょうか？

したいイリア・セルヴィンスキー、「個人の自由なんか存在しない」とあなたは言われます——「インテリは未だかつて自由ではなかったし、決して自由ではありえない」と。

私の全生涯は、事実によって、その反対の証拠です。私は自由に生きました、常に自由に、私が愛したいっさい、私が擁護したいっさい、在りのままの私に対して敵対した多くの人々の中であつて。私は憎しみに取りかこまれて、ほとんど絶対的に孤独な思惟に生きるという犠牲を払って、自分の自由を買はねばならなかったのです……しかし私は自由であり、ずっと自由に止まるという熱烈な義務のために「世間から受ける」いっさいの尊敬を犠牲にしました。私はずっと自由でいました。一生、自由で孤独でした。私は彼らの高慢な独断的意見や利己的な偏見を何一つ承認できないインテリゲンチヤたちの中で、ただ一人でした。私はただ一人、祖国において、その国家主義を攻撃し、1914年に、兄弟殺しの戦争を告発しました。

さらにまた（1919年の）講和以来、掠奪（を目的とした）、いんちきの講和をただ一人で攻撃し、その講和の改訂を主張しました。西ヨーロッパにおいて少数の人々と共に、わたしは、ソ連を擁護し、ソ連の味方になりました。——だから、イリア・セルヴィンスキー、「人は決して自由ではない」！と言わないで下さい。自分の自由な魂のためにいっさいを犠牲にする覚悟をしている者は自由です。そういう心構えの者が今日少ないとすれば、それなら、なおさら、私とその模範を示すことが必要です。私は死ぬまで、それを示すでしょう。

フェドール・グラトコフ、あなたの意見では、野獣的争乱の世界で、「今日その話をするのは、こっけいだ」という「人間性」に関して、まさに現在においてこそ、それを擁護する価値が若干あるということをおあなたに申したいのです。なぜかという、そういう考えにはより多くの危険があるからです。それは戦闘における軍旗です。まさにそれが踏みにじられようとしているのです。衝突している狂人どもの足もとから私はその旗を拾いあげるのです ……………

もちろん、「人間性」と「平和」の偽善者たちに烙印をつける点では私たちは一致しています。「リリュリ」の作者ほど激烈にそれをやった人があるでしょうか？しかし偽善者はあらゆる問題の中に、あらゆる時代にあります。あなたの従者の中にもありますよ。それはライオンの後に従う山犬です。ライオンたちの食い残しを腹一杯食うために、そしてもしもライオンが病気になるか、負傷をすれば、彼をやっつけるためです。死肉を食う奴とライオンとを混同してはなりません。——「私の信仰を裏切るよりもむしろ死を！」と言う勇敢な個人主義と、自分の腹を満腹させ、自分の虚栄心をみだし、自分の利益のみを求める利己主義とを混同しないでください！ 国際平和局で年金をかせぐタルチュフ（偽善者の意）たちのいんちきの人道主義と、迫害され、搾取された大衆たちを解放し、啓蒙しようとする愛と犠牲の焰——あなた方に生命をあたえている火そのものとを混同しないで下さい！——なぜかという、ソ連のわが友人たち、あなた方は自由な良心たち、従って、そうとは知らずに——そしてそれとは知らずに、真の個人主義者たちであり——またそうとは知らずに（それを知らないでしょうか？）あなた方は人類の真の使徒であり、真の熱愛者です。

私はあなた方に持って行きます、彼らの運命の支配者たる勤労者たちの陣営へ、精神の自由と人間性との神聖な旗を持って行きます。それを投げすてるような盲人にならないで下さい！ その旗を誇りにして下さい！ 彼らが来てあなた方と並んで戦うことをよろこんで下さい！ ……シェイクスピアの見事な『アントニーとクレオパトラ』を思い出されるでしょうか？ —— まさに世界の運命を決定し、帝国をオクタヴィウスに委ねようという大戦の前夜に、アントニーの陣営の上、空中に、不可思議な音楽 —— 目に見えない、遠ざかって行く行列の笛の音と歌声が聞えます。それはディオニソスの行列です、彼を残して行くアントニーの神々です。神々はこれから死ぬアントニーを見すてるのです…… 昔の世界の神々、「自由」と「人間性」はあなた方の敵の陣営を見すてるのです。彼らはあなた方の方へ来ます。彼らを歓迎してください。彼らをあなた方のところへつれてくる者の手をとって下さい！ その手は闘争の生涯の試練をへています。それは確かな手です。その手はあなた方の手を握りしめます。

兄弟の心をこめて

ロマン・ロラン」



ロマン・ロラン没後30周年記念

講演と音楽の夕べ

講演 ロマン・ロランと美術（比較精神史の試み）

講師 成蹊大学教授 佐々木 斐夫氏

音楽 ポール・デュパン作曲「ジャン・クリストフ」より
「ゴットフリートおじさん」

ベートーベン作曲 「作品106番から」
アダージョ

演奏 玉城 嘉子氏

日時 1974年12月5日（木） 午後6時

場所 関西日仏学館

主催 財団法人ロマン・ロラン研究所

後援 関西日仏学館

< 報告にかえて >

ロマン・ロランは、1895年夏、主論文「近代叙情劇の起源」と、副論文「16世紀イタリア絵画衰退の原因」によって、学位をうけ、母校エコール・ノルマルで美術史を教えるようになった。ロランの社会的地位は、より向上し安定したが、他方、芸術家として創作に専念したいとの望みは、いつそう大きくなり、悩んでいた。「社会主義の啓示」をうけるのも、この頃である。

講演の「ロマン・ロランと美術」は、佐々木先生が、前記ロランの論文「16世紀イタリア絵画衰退の原因」の紹介を中心に、一時間余にわたって、詳細に学問的に解説された。——イタリアの絵画美術は、16世紀に、絶頂期のすぐあとで、衰退してしまった。その最大の原因は、芸術家の精神が、真の生ける自然から遠ざかり、そして自然とあいたたいするものとなり、つめたい知性におおわれてしまったからである。「愛と意志とのみずみずしさ」を失い「情熱の新鮮な空気」が不足してしまった。彼らは、民衆との生きた接触をなくし、民衆の素朴な感性から遠ざかっ

てしまった。——先生は、ロランの論文の解明のあと、ロランとバロック的なものとのつながりから、ロランのエロイズムにおよび、この論文が、80年後の今日、高い認定を受けるべきだと述べられた。そして、ロランの「価値あるものは、尽きない努力なしでは達成されない」ということばと、「より高い、真・善・正に近づくためには、自分みずから困難をつくりだし、遭遇し、しかも、それを乗り越えてゆく、というような人間的努力には、果てしがない」という、ロランの基本的思想であり、生活態度であったことばとを引用して、この観点からこそ、この論文を評価すべきであると講演の最後を結ばれた。

かつて「ジャン・クリストフ」を読んだものは、その全篇の中で、ゴットフリートおじさんの人物と、その物語から、もつとも美しくて哀しい話として、深い感銘をうけたにちがいない。彼は小柄でやせていて、いくぶん猫背で弱そうだが、てっぺんがすっかり禿げ、ばら色で円錐形をした小さな頭には、すきま風に吹かれるのをおそれ、いつもふちなし帽子をかぶっていた。四十にさえなっていないのに、五十才にもみえ、わすれな草の花の色のような、あおい瞳と、しわのよった善良そうな顔をのぞくと、すべてが貧弱であった。いつも大きな荷物を背負って村から村へ歩く行商人。一つ所に落ちつかず、やって来たときと去っていったときと、ときには、そこに彼がいることさえも、みなから気にとめられない彼。共通の苦しみをへたあとで、家系の中で、たった一人生き残った妹をのぞいては、彼は、だれからも理解されず、また問題にされなかった。そればかりか、からかわれ、軽蔑さえうけた。そんなときにも辛抱よく耐え、いつもしづかに微笑んでいた。まわりの人たちは彼に愛を与えないのに、彼は、かわらない誠実さで愛を与えていた。

一方クリストフは、すでに喜びや苦しみや、社会の不正を経験し、生にめざめていた。彼は打算的な父や、やさしい祖父の後押しで作曲をはじめ、少しほめられたため「僕はえらい作曲家なんだ」と傲慢に感じるようになっていた。

そんなある日、クリストフは、ゴットフリートについて散歩に出て、近くの河岸にすわっている。明るい空に星々がきらめきはじめ、河のさざ波が岸辺をたたいて、かすかな音をたて、あたりは夜のかげにつつまれ、さきほどまで神秘的にみえていたゴットフリートの顔がみえなくなっている。急に、夕闇の中で、ゴットフリート

は歌をうたう。よわい、おぼろな、心の思いがそのまま声になり、歌になったような歌を。そして、まわりにはだれもいないかのように。「ゆるやかな、率直な、無邪気なこの歌は、おもおもしろく悲しげな、やや単調な足どりで、決して急きこむことなしに進んだ。そして、ときどきしばらく沈黙しては、どこへ行き着くかは気にかげずに、ふたたび歌いつづけられ、そして、歌は夜の中に消えていった。……その歌の晴れやかさの中に、心の動乱が充ちていた。外観の平和の下に、長い長い歳月の苦悩が眠っていた。……」おどろいたクリストフに、伯父は、この歌は、だれがつくった歌でもなく、ずっと昔からあったもので、歌には、かなしいときや愉快なとき、疲れていて望郷のおもいやみがたいとき、自分を軽蔑して泣きたくなったとき……のものがあることを教え、そして「明けてくる新しい日に対して敬虔な心をお持ち！ 今日というこの日のことを考えるがいい。……人生に無理な力を加えてはいけない。その日その日に対して敬虔であるように。」と教えをげます。

わたしたちのほとんどが、ゴットフリートのように、純粹に、善良には生きることとはできない。彼をみていると可哀そうで、あわれで、じっさいに近くにいると、腹立たしくて、ばかだとおもうかもしれない。（もし、わたしたちがゴットフリートの生き方をまねると……？）しかしこのゴットフリートの物語は、わたしたちの思想や行動のちがいをこえて、すべての人間が心の奥深くにもっているもの、絶対的な聖や善への憧れ、を刺激し、それに働きかけ、そして、おのおのの生をかえりみさせずにはおかないものである。

「ゴットフリートおじさん」の作曲者のポール・デュパンは、貧しくて音楽会へは行けず、自分と家族のパンを得るために、昼間は激しい労働をしたあとで、孤独とたたかいながら、真夜中、巨匠たちの楽譜をみて、全く独学で、作曲をつづけたといわれる。ロランは彼の音楽的才覚を見出しパリの楽団へ紹介した。この曲は、ポール・デュパンが、「ジャン・クリストフ」を読んで感動し、ゴットフリートとクリストフとの対話をテーマとして、作曲したものである。

ベートーヴェンの作品106は、ロランが「永遠のアンティゴネーに」（女性を論じた崇高な論文）の中で、「わたしが得ている最良のもの、あるいは少しでも良い

もの、……戦時の擾乱のなかでわたしが、人間的友愛へのかわらない信仰や、愛に対する愛や、憎しみに対する侮蔑を保持しえたのは、わたしの母とマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークです」と告白し、「第二の母」とも呼んだ、マルヴィーダと、ロランとがもっとも愛した曲の一つである。そして、この曲のアダージョについて「彼女のいちばん愛する音楽作品は、わたしのいちばん愛する音楽作品であった。同一のハーモニーが、同じ瞬間に、わたしたち二人の心の同じ糸に触れているのを感じた。マルヴィーダの特に好きな曲は、ベートーヴェンの作品106のひろびろとしたアダージョ——あの孤独の広大な詩……夜のおそい時間に、マルヴィーダと私との二人だけのときに、これらの音楽をわたしは彼女のためにピアノでひいた」と「内面の旅路」の中で語っておりロランが「彼女のアダージョ」と呼んでいたものである。

後半の音楽の部では、ロランにもっともゆかりのある、これらの二曲が、玉城嘉子さんによって演奏され、感銘をうけた。

(織田和夫)



『ピエールとリュース』を読むにあたって

波多野 茂弥

1914年にはじまった第一次世界大戦は、それまで“政治に触れる”ことなど思いもよらなかった作家ロマン・ロランにとって、彼を未知の行動の領域へわけ入らせる運命的な転機となった。たまたまスイスにいて大戦勃発の報に接したロランは、時として祖国フランスへ馳せ戻りたい衝動をおぼえながらも、人類の同胞愛にめざめた自由な知識人としての使命感から、そのままスイスに踏みとどまり、狂熱と憎悪に沸きかえる動乱の渦中であって、飽くまで理性と人間性を守ることを固く決意したのだった。そして彼は、正義の仮面をかぶった戦争が犯す不正や暴虐にたいして果敢な抗議をおこない、国家主義の激情に盲いたあらゆる国の知的指導者たちに理性の回復をつよく訴える一方、破滅にひんしたヨーロッパ社会の再建への手がかりを模索しつつ、戦争の災禍に苦しむ不幸な人々を援け、なぐさめ、力づけるために、献身的な活動をつづけた。

ロランのこのような態度と行動は、心ある人々の共感と支持とを次第に広げてはいったものの、彼はそのためにすべての交戦国——とりわけ独仏両国——のはげしい敵意と憎しみの的となり、おびたしい侮辱迫害に身をさらさねばならなかった。もちろん、いかなる嘲罵や攻撃も、いかなる奸計や脅かしも、彼の精神の節度と公正さをゆるがすことはできなかったが、しかしそのことは決して、彼が超然として動乱の世界を見おろしていたことを意味するものではない。それどころか、彼の心は絶えず忍びよる憎しみや虚無感の襲撃にさらされ、かさなる不正や狂態にたいするやり場のない憤りに焼かれ、それにもまして日々につのりゆく災禍とその犠牲の増大に悲しみ引き裂かれており、彼はその苦しみに死を乞い願うことさえ一再ならずであった。彼の精神のあの明澄な視力は、こうした死ぬほどの苦しみによって贖われたものなのだが、彼がそれに打ち克って前進するためには、家族や友人たちの支持も、新世界の誕生（1917年のソヴィエト革命の成功）がもたらした希望の曙

光も、なお十分ではなかった。

ロランがその生涯に生み出した数々のすぐれた著作のうちには、この戦争の苦難の時期に手がけられた三篇の創作——現代を痛烈に諷刺した幻想的な笑劇『リリュリ』、『戦時における一人の自由な良心』の苦悩とたたかきを描いた思想小説『クレランポー』、およびこの『ピエールとリュース』——があるが、それらはまさしく、作者がそのあまりにも耐えがたく重苦しい悩みの日々を生き抜くために自ら創りださざるをえなかった、彼に残る殆んど唯一の心の支えであり、現実と自我のしがらみからの解放のよろこびであり、慰めと安らぎだったのである。

『ピエールとリュース』の制作時期は1918年の春から夏にかけてのほぼ三ヶ月にまたがっているようである。この時期は、同じ年の春分にはじまるドイツ軍の総攻撃以来、西部戦線で間断なく続けられている激闘の真最中であり、結果から言えば、この戦いが11月の休戦に至る最後の決戦となるのだが、戦争はまだ二・三年つづくというのが大方の予想であった。その頃のロランの日記や親しい友への手紙にも、以前にもまして沈痛な空気がただよっている。したがって『ピエールとリュース』は、開戦以来四年を経過しようとしてなお重苦しく垂れこめた戦雲の下で、なおも激化の一途をたどる殺戮と破壊のあらしに、もはや抗するすべもなく立ち会わねばならなかったロランが、民意に反して戦争をつづけている恥ずべき投機家たちにたいする憤りや、戦争を十字架として担うには余りにも若くして犠牲を強いられた人々への憐れみに、ともすると昂りがちな自らの心をしずめ、精神の独立を保持するために、彼の内部でひそかに交えつつあった魂の熾烈な戦いの果実であり、彼の胸にその苦悩の奥から抑えがたくこみあげてきた愛と平和への切なる祈りの結晶にほかならなかった。

『ピエールとリュース』の舞台は、1918年の1月末¹⁾から3月末²⁾までのパリとその郊外におかれている。

入隊を六ヶ月後にひかえた十八才の少年ピエールの毎日は、もはや悪夢のような絶望の連続でしかなかった。ところがある日、空襲下の恐怖のなかで偶然ひとりの少女リュースに出会ったことから、彼の心にはふたたび“明日”が甦った。——やがてセーヌの河岸で、リュクサンブール公園で、無邪気に交わされる二人の語らい

は、孤独と絶望の深さのゆえに彼らをますます魅惑し、清らかな愛を育んでいった。しかし戦局の切迫としのびよる死の気配は、二人の愛にも次第にきびしい相貌を与えずにはおかない。彼らは二人だけの愛の世界に立てこもり、残された日々を精いっぱい生きることを希った。そしてお互いの愛の証しとして、神の前に魂の結婚を誓おうとするのだった。—— 3月29日聖金曜日、受難のキリストを讃える奏楽が高まるサン＝ジェルヴェ教会堂で、二人が誓いの言葉を捧げたそのとき、突如、轟音とともに大石柱が倒れかかり、可憐な二人の姿もその下に折り重なってくずおれていった。……………

死と虚無の深淵の上で、未来へのいっさいの希望を奪われながら、ひたむきな愛によって光にみちた静かな悦びの島をつくり成しつつ、どこまでも人間らしく生きることを求めてやまなかったビエールとリュース！ 彼らの運命をとおして描かれたこの『戦争と人間のドラマ』は、愛することと生きることの意味について、いまの世界の在り方について、あるいはまた戦争と平和——とりわけ真の平和——について、しずかに考えさせずにはおかないであろう。

註

- 1) 「1月30日～31日。ドイツ空軍機がパリを爆撃。去るクリスマスの夜に、連合国側がライン地方の町々を爆撃したことに対する報復として、14,000キロの爆弾を投下。死者約40名、負傷者200名近く。」
(ロラン・ロマン「戦時の日記」)
- 2) 「聖金曜日、3月29日午後4時。勤行の最中にドイツ軍の爆弾がパリのある教会堂に落下。ゴチック様式の穹窿を打ちくだき、165名の犠牲者を出した。そして、その大部分は婦女子であった。キリスト教徒であるドイツ皇帝は、このような仕方では彼の信仰を表明した。」
(ロマン・ロラン「戦時の日記」)

ロマン・ロランの「ピエールとリュース」について

(ヘルマン・ヘッセ)

短くて、魅力あふれるこの作品(「ピエールとリュース」)は、ロランの数々の偉大な作品のうちでは、目立たない存在であるかも知れない。しかしながら、この作品には、もっとも純粋な詩情の幾ページかが含まれている。それは、愛し合っている若い一組の男女——18才のバリのリセの一学生と、自分の生活の資を得るために働かなければならないかわいそうな一少女との物語である。彼らは二人とも、まだほとんど子供なのであるが、その彼ら二人の上に、どす黒く不吉な運命の影がたちこめている。というわけは、すでにピエールの入隊が決まっていて、——戦火は、バリの間近で猛威を振っているのだ——もはや彼には、数週間あるいは数日しか残されていないからである。戦場に、炸裂する榴弾と戦死者たちとのただ中に、もう一つの別な世界に属する美しい平和な花々が咲き出でると同じように、戦時のバリのまっただ中で、この二人のうるわしい子供たちは、彼らの愛の中に咲き出でるのである。

(カイエ＝ロマン・ロラン 21,

「ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセの往復書簡」より)



(編集部 三木原 浩訳)

原書講読会だより

“愛と死のと戯れ”に引きつづいて、48年秋から“ピエールとリュース”を読んでいます。講師の波多野先生の御多忙のために、会が持てないことが重なったりして、遅々とした歩みですが、原作の魅力に惹かれて何とか読了したいと頑張っています。参加者は現在7名。

ロマン・ロラン研究所公開講演会報告

第 1 回

テーマ 「ロマン・ロランと日本の青年」(短編映画ロマン・ロラン上映)

講師 宮本正清氏

日時 1971年5月15日(火)

場所 関西日仏学館

第 2 回

テーマ 「苦悩のなかのインド」

講師 森本達雄氏

日時 1971年11月27日(土)

場所 ロマン・ロラン研究所

第 3 回

テーマ 「ロマン・ロランとフランス革命」

講師 波多野茂弥氏

日時 1972年6月24日(土)

場所 ロマン・ロラン研究所

第 4 回

テーマ 「ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして」

講師 高井博子氏

(スライド上映)

日時 1973年5月26日(土)

場所 ロマン・ロラン研究所

第 5 回

テーマ 「私の人間観」

講師 末川 博氏

日時 1973年12月18日(火)

場所 関西日仏学館

第 6 回

テーマ 「私の通った芝居の道」

講師 毛利 菊枝氏

日時 1974年6月29日(土)

場所 ロマン・ロラン研究所

第 7 回

テーマ 「ロマン・ロラン没後30周年記念

— 講演と音楽の夕べ —

講師 佐々木 斐夫氏

演奏 玉城 嘉子氏

日時 1974年12月5日(木)

場所 関西日仏学館



友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会の例会は、現在までに通算211回をかぞえています。その活動状況は下記の通りです。

1974年6月22日(土)

204回 定例会

第29回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 「ロランとシェイクスピア」 芸術論集「道づれたち」から

発表者 森 孝子氏

出席者 27名

9月28日(土)

205回 定例会

第30回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 「ロランとトルストイ」 芸術論集「道づれたち」から

発表者 宮本 正 清氏

出席者 22名

10月26日(土)

206回 定例会

第31回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 「ロランとルナン」

発表者 波多野 茂 弥氏

出席者 25名

1975年1月25日(土)

207回例会

第32回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「ロランと現代」 シンポジウム

出席者 25名

2月22日(土)

208回例会

第33回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「ロランとヴィクトル・ユゴー」 芸術論集「道づれたち」から

発表者 大橋 哲夫氏

出席者 9名

3月22日(土)

209回例会

第34回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「ロランとゲーテ」 芸術論集「道づれたち」から

発表者 南 大路 振一氏

出席者 15名

ユニテ 第3期 第3号

発行日 1975年3月31日

編集代表者 大橋 哲夫

発行所 ロマン・ロラン研究所

京都市左京区銀閣寺前町32

TEL(075)771-3281

印刷所 昭和堂印刷所

京都市左京区百万辺交差点電停前

* ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時

場所 ロマン・ロラン研究所

会費 200円

講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

* 原書講読会

日時 毎月第2, 第4土曜日 午後3時～5時

場所 ロマン・ロラン研究所

会費 100円

講師 波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所